初年次教育「スタートアップ看護ゼミナール」の 4 年間の取り組みと発展的課題

古田　桂子（岐阜協立大学看護学部）
緒方　京（岐阜協立大学看護学部）
戸村　佳美（岐阜協立大学看護学部）
長谷川　真子（岐阜協立大学看護学部）
浅井　佳士（岐阜協立大学看護学部）
松原　薫（岐阜協立大学看護学部）
野網　淳子（前岐阜協立大学看護学部）
鍬原　直美（元大垣女子短期大学看護学科）
我部山　キヨ子（前岐阜協立大学看護学部）

キーワード：初年次教育、社会人基礎力、看護学生、学士課程

抄　録

本学看護学部は、開設の 2019 年度より 4 年間にわたり、1 年次通年の正課外活動として初年次教育「スタートアップ看護ゼミナール」を実施してきた。本稿ではその足跡を振り返り、活動の成果と今後の発展的課題を検討したので報告する。

活動目的は、看護職を目指す者の基礎的技能・態度の育成、キャリアデザインの検討機会の提供、及び看護専門職に求められる社会人基礎力の養成である。方法は、看護学部教員で組織する委員会を中心に企画・運営し、キャンプ・講座で構成した。また、学生の参加状況やニーズに応じて年々ブラッシュアップを重ねた。活動評価目的で開催回毎に実施した参加者へのアンケート結果から、活動目的の達成度や今後の活用への期待といった参加学生の満足度の高い企画が実施でき、特にキャンプは社会人基礎力を養えるプログラムと評価できた。講座は、学生の関心が高いテーマを取り上げ、参加学生の満足度は高かったが、参加率の減少が課題となった。今後は、社会の動向と学生のニーズ、看護学士課程における初年次教育の必要性を合致させた内容と方法を吟味し、初年次以降の教育への接続性、社会人基礎力養成の継続性を検討する必要がある。

1. はじめに

「スタートアップ看護ゼミナール」は、本学看護学部の開設当初から教育の特色の一つとして位置づけられた正課外活動である。この契機は、入学生が新しい仲間や大学の環境に早期に慣れることができるよう、入学間もない時期に学生が楽しみながら仲間と打ち解け、大学生活に親しみを感じられる企画を、と

の看護学部長（当時）の提案によるキャンプの開催であった。これを受けて早々に教員のプロジェクトチームを立ち上げ、企画したのが「スタートアップ看護キャンプ in 白川郷」であり、「スタートアップ看護ゼミナール（以下、SUN ゼミ）」のスタートとなった。

SUN ゼミは「Start Up Nursing Seminar」の略で、看護職を志す学生の目的達成に向けた始動であり、自らの目標のために成長し続けてほしいという思いから“スタートアップ”と命名した。そこには、期待をもって本学に入学した学生たちが、大学生活のスタートに必要な仲間づくりを支援すること、将来のビジョンを描き、看護職に求められる社会人基礎力を養う「歩み始め」という意図もある。

社会人基礎力とは、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」と定義され、3 つの能力、すなわち＜前に踏み出す力＞＜考え抜く力＞＜チームで働く力＞と 12 の能力要素から構成されており、2006 年に経済産業省から提唱されたものである[1]。社会人基礎力は人と人との関係性の中で育まれるものである[2] ため、現代は人と人との関係性が希薄になっている社会背景が関連して、その育成の重要性が指摘されている現状がある。看護の現場は、24 時間の患者との関りや医療スタッフとの協働が必須になる。そういったことを受けて箕浦は、人との交流を基本とした業務を遂行する看護職は「社会人基礎力」を身につけることが必要だと述べている[3]。

大学に入学した学生は、新しい環境に慣れることを余儀なくされる。それは、広いキャンパスや通学方法、場合によっては下宿生活といった物理的な環境だけでなく、学生が高校までの学習と大学での学修の違いに戸惑うことなどさまざまな質的環境の変化も含まれる。

大学全入時代と言われる現在、2022 年度の大学進学率は 56.6％で過去最高の割合になった[4]。少子化が加速し、多くの学生が大学に入るという現在は、大学入試方法の多様化を背景に入学者の在り様も変容し、学生の学習意欲の低下や目的意識の希薄化が顕著になった現状がある[5]。中央教育審議会は、2008（平成20）年の「学士課程教育の構築に向けて」において初年次教育の重要性を提言している[6]。初年次教育とは、基礎学力や学習に対する動機付け及び授業への取り組み方にかなり個人差がある入学生を速やかに大学生活に移行させることを目的とした教育である[7]。2022 年度の大学の看護師養成課程数[8]は 296 となり、入学生数も過去最多となった。看護系の学部においても初年次教育の導入傾向は例外でなく、学習習慣が身についていない学生も一部に見受けられる現状があり、平成 30 年 1 月に富樫らが全国の看護系大学の実態調査を行い、86％以上の学部で初年次教育を取り入れている[9] 実態とその内容および評価方法について報告している。その後も看護系大学では、初年次教育の取り組みに関する研究を数多く発表しており、その必要性と関心の高さが推察される。

学部で企画・実施した SUN ゼミは、当初の実施目的から、入学時キャンプの他に学生の状況やニーズをくみ取り内容を企画した各種講座（以下、講座）や参加型の演習を設定し、参加状況に応じて毎年度少しずつ変容させていった。しかしながら、2019 年 12 月初旬からの新型コロナ感染症（COVID-19）出現以来、度重なる感染波が押し寄せる中で、自由参加の正課外活動であることに起因する受講者数の低下への対策や、1 年次に限定した講座の中で社会人基礎力を養うことの難しさを実感し、効果的な方法を模索した 4 年間でもあった。

開学時にスタートした SUN ゼミは、新大学完成年度を迎え、2023 年度から初年次教育に重点を置いた正課科目としての「スタートアップ看護ゼミナール」になった。これを機に 4 年間の活動を振り返り、今までの成果と今後の新しい初年次教育「スタートアップ看護ゼミナール」に期待される課題を検討したので報告したい。

2. 活動概要

2.1　目的

SUMゼミの全体の目的は、①看護職を目指す者としての基本となる技能・態度を養うこと、②自身のキャリアデザインを考える機会とすること、③活動を通じて看護専門職として求められる社会人基礎力を養うことと設定した。そのうち、スタートアップ看護キャンプ（以下、キャンプ）は、大学生活に不安や戸惑いがある学生たちが充実した学生生活を送れるように、入学生同士や看護学部教職員との親睦を図ることを主な目的として企画した。

2.2　活動内容

活動は、キャンプと講義・演習・交流などテーマに合わせた方法で実施した講座とに分けて、毎年、内容を企画して実施した。企画は、年間を通じた活動を振り返り、見えてきた成果や課題を次年度の活動に反映させて調整を図った（表1）。

表１　ＳＵＮゼミの活動の経緯

	【2019年：1期生】	【2020年：2期生】	【2021年：3期生】	【2022年：4期生】
主な活動	・宿泊型キャンプ：白川郷 ・講義：労働と権利、プレゼンテーション、レポートの書き方、国家試験対策 ・演習：アンガーマネジメント、社会人マナー ・交流：卒業生や看護職スペシャリストの講演・交流を通した「自己のキャリアデザインを考える」	・学内探索：Webによる学内ツアーとクラスメイト紹介 ・講義：アサーティブコミュニケーション、レポートの書き方、国家試験対策 ・演習：アンガーマネジメント、社会人マナー ・交流：看護職スペシャリストの講演・交流による「自己のキャリアデザインを考える」	・デイキャンプ：上石津 ・講義：労働と権利、アサーティブコミュニケーション、レポートの書き方 ・演習：アンガーマネジメント、社会人マナー、プレゼンテーション、効果的なグループワーク方法 ・交流：看護職スペシャリストの講演・交流による「自己のキャリアデザインを考える」	・デイキャンプ：関ヶ原 ・講義：レポートの書き方 ・演習：社会人マナー、プレゼンテーション ・交流：看護職スペシャリストの講演・交流による「自己のキャリアデザインを考える」
教員が大切にしたこと	・大学生活をスムーズにスタート出来るよう、共に学ぶ仲間作りや教員との交流の機会を多く持たせたい。 ・看護職を目指す大学生としての社会人基礎力の必要性を理解し、授業、実習等に臨む姿勢､態度を身に付けさせたい。 ・看護職としての将来の自分をイメージし､目的意識をもって4年間を過ごすきっかけを作りたい。	･2年次科目｢キャリア演習｣を踏まえ、社会人基礎力に重点を置いた内容とした。 ・コロナ禍での活動であったため、オンライン上の制限はあってもキャンパスや仲間の事を知り、本学の学生であることを再認識し、希望を持って自宅で過ごしてほしい。 ・学生が活動に参加しやすいよう、授業日との関連をみながら時間割の工夫を行った。	・各活動が目的としている社会人基礎力を明らかにして企画、運営する。 ・学生が自分にとって必要な講座だと感じ、意欲的に参加してもらえるようにしたい。 ・学部教員全員に活動を理解してもらい、様々な教育の場で活かしてほしい。 ・キャンプでは、1年生が他学年の先輩と関わる機会が持てるよう､2年生のボランティア学生の参加を促す。	・各活動が目的としている社会人基礎力をさらにブラッシュアップして内容を企画、運営した。 ・キャンプでは、社会人基礎力の多くの要素を養える創作パフォーマンスを実施。達成感やチームでの協同のすばらしさを体験してほしいと考えた。 ・大学生としての初年次教育の必要性も意識した。
活動を通じて見えてきたこと	・学生にとっては自己の現在の学生生活に直接関連する内容に関心が高い傾向がある。また、正課科目としての活動ではないため､参加率が少ない。	・社会人基礎を教員と学生が意識しながら活動する必要がある。また、看護職として必要な要素をさらに入れる必要があり、4年間での成長も見据えることが求められる。	・活動に参加した学生が固定化し、参加者にとっては有意義な時間であったが、その他の学生への働きがけが課題である。	・前年と同様に自主的に参加する学生が少ない。看護職に必要な社会人基礎力、大学生としての基本となる力の必要性を理解させていくことが重要。

キャンプの活動内容の詳細を表 2 に示す。1 期生は、宿泊型キャンプを白川郷で実施したが、2 期生は 2020 年 2 月からの COVID-19 感染拡大の影響で実施できなかった。3 期生、4 期生は、感染防止対策を考慮して宿泊は取りやめ、日帰りキャンプで企画し実施した。

表２　スタートアップ看護キャンプの活動内容

対象（入学年度）	活動形態・場所	主なプログラム
1 期生 (2019 年度)	1 泊 2 日の宿泊研修 1 日目　トヨタ白川郷自然學校 2 日目　白川郷	アイスブレイク チームビルディング：なりたい自分になるために（マンダラチャート） グループワーク：DVD『家で死ぬということ』視聴 ディスカッション「その人らしく生きるを支えるとは」 岐阜の郷土理解とチームビルディング：白川郷散策・オリエンテーリング
2 期生 (2020 年度)	コロナ禍により中止	
3 期生 (2021 年度)	デイキャンプ（コロナ禍により宿泊中止） 大垣市かみいしづ緑の村公園	アイスブレイク チームビルディング：ゲーム・写真コンテスト グループワーク：「信頼される看護師になるために必要なこと」、教員紹介
4 期生 (2022 年度)	デイキャンプ（同上） 関ケ原ふれあいセンター 関ケ原古戦場記念館	アイスブレイク チームビルディング：創作パフォーマンス（創作・発表）、教員紹介 西濃の郷土理解：古戦場記念館見学

3. 活動報告

3.1　活動の実際

3.1.1　2019 年度：1 期生

初年度は、全国から入学した学生に岐阜郷土の理解を促す意図もあって白川郷を選択し、宿泊型のキャンプでスタートした。入学して間もない学生たちは、移動バス内でのレクリエーションや宿舎でのアイスブレイクなどの交流を通じて、緊張した表情が和らいでいった。夜は宿舎の談話室で車座になり、時間に追われず学生間や参加教職員と自由に語り合える場を提供したことにより、学生生活上の不安や疑問を解消したり、グループ外の仲間と知り合える時間となっていた。2 日目のオリエンテーリングでは、グループワークの後、白川郷の美しい景色と晴天のもと、心地よい陽気の中で和気藹々と散策していた。

看護学部生としての目標づくりでは、『マンダラチャート』を用いてグループワークを行なった（写真 1）。マンダラチャートは、中央のセルに「めざす姿」、その実現のための 8 つの要素を周囲に書き出し、さらにその要素を養うための行動を書き出す作業により「めざす姿」に向けた日常的な行動目標を可視化できる（写真 2）。グループワークでは、メンバー間で「めざす姿」の共通項を話し合い、それを達成するために何をすればよいか、8 つの要素とそれらを実現する具体的な行動について意見を交わした。各グループに共通していた目標は「信頼される看護師」が多かったが、知識や技術のみならずメンタルヘルス・人間性・健康管理など多面的な要素が抽出され、その達成方法の共有をとおして努力する方向性を広い視野で検討することができていた。

写真１　マンダラチャート作成の様子

写真２　学生が作成したマンダラチャート

講座は、大学生活をスムーズにスタートできるように、「グループワーク・ファシリテーション」、「労働の義務と権利」、「国家試験対策」、「レポートの書き方」、「スピーチ力・プレゼン力を高める」のテーマで順次開講した。また、多様な価値観を持つ集団の中で人間関係を円滑に形成するために「社会人マナー」、「アンガーマネジメント」の演習を実施した。キャリア形成の基礎づくりでは、将来の看護職としてのビジョンを描き、自らの学生時代にすべきことを明確にするため、新人看護師や看護職のスペシャリストを講師として迎えて交流を図り、自分自身のキャリアデザインを考えられる機会を設けた。

3.1.2　2020 年度：2 期生

COVID-19 第 1 波の影響により 2020 年 4 月の対面授業が全学的に中止となり、2 期生のキャンプは延期となった。また、前期授業の開始も延期され、自宅やまだ住み慣れない下宿で待機する学生のため、学内のオンライン会議システムが整備されると同時に Web による学内ツアーとクラスメイトとの交流・SUN ゼミ紹介を一週間ごとに実施した。

正課外活動も対面が制限され、講座開始が遅れたことにより年度当初予定していた内容は余儀なく見直しの必要に迫られ、学生の関心の高かった講座「レポートの書き方」、「国家試験対策」、「社会人マナー」（写真 3）、「アンガーマネジメント」、「アサーティブコミュニケーション」、「キャリアデザイン」（写真 4）に絞り実施した。

写真３「社会人マナー」正しいお辞儀の指導（Web）

写真４「キャリアデザイン」スペシャリストに質疑応答（Web）

2020 年度の活動の振り返りでは、社会人基礎力を養うための方法を議論し、キャンプや講座の目的の学生への明示や、より能動的な参加を促進する実施方法の検討や工夫が課題であった。

3.1.3　2021 年度：3 期生

2021 年 4 月は、COVID-19 の感染縮小状況からキャンプの実施は可能となったが、宿泊型は十分な感染予防が困難と判断し、密集をできるだけ回避するため、クラスを半分割した 1 日ずつのデイキャンプに変更した。キャンプ会場は、大学から近距離にありながら、屋内外の活動が可能で緑豊かな大垣市かみいしづ緑の村公園とした。また、白川郷キャンプを体験した上級生に参加してもらい、アイスブレイクやチームビルディング（マンダラチャート）などの活動を支援してもらった。新たな企画として「仲間」をテーマにした写真コンテストをグループ対抗で実施した。学生は、公園内を自由に散策し、グループ内でアイデアを出し合い、山や森などの自然を背景に創造性の豊かな作品を作成していた（写真 5・6）。学生の独創的なアイデアや取り組む姿勢をみて、学生主導で行える企画を増やすことの可能性が感じられた。

写真５　「仲間」をテーマにした作品１

写真６　「仲間」をテーマにした作品２

2020 年度の課題であった各活動で培う社会人基礎力については、養いたい能力要素は何かの検討を委員メンバー間で繰り返し、意識化して企画・運営を行った。開催されている講座が、自分にとって必要な内容だと学生自身が感じ興味を持ってもらえるように、内容の精選を行うとともに、講座前に案内メールを配信して周知を図り、講座内容や前年度の学生の感想を含めて受講メリットを伝えた。終了後の活動評価用アンケート調査には手軽に送信できる Forms を用いた。

3.1.4　2022 年度：4 期生

2021 年度に引き続き、十分な感染防止対策の下でデイキャンプを実施した。教員主導の企画ではなく学生が主体となって取り組めるように、チームビルディングに創作パフォーマンスを導入した。まずグループで「仲間との団結」「夢に向かって」「春の躍動感」の中から 1 つのテーマを選び、学生が好きな方法で表現しそれを発表した。団結を大縄跳びの挑戦（写真 7）で、春の躍動感をダンスやちぎり絵（写真 8）で、夢を他者紹介とともにプレゼンテーションするなど、制限時間の中でもアイデアを出し合い、協力し合って生き生きと活動していた。

写真７　「仲間との団結」を大縄跳びの挑戦で表現

写真８　自分たちの「夢」を桜で表現

講座については、例年後期にかけて受講率が減少する傾向にあったため、さらに開講講座の内容と方法を精選し、タイムリーな学びとなるよう前期に「レポートの書き方」、「社会人マナー」、「プレゼンテーション」の３講座、後期は初年度から実施している「キャリアデザイン」１講とした。

3.2　活動評価

キャンプや講座の事後は活動評価のためのアンケート調査を学生に依頼した。調査の協力は学生の自由意思とし、学生へのフィードバックや次年度以降に反映するための活動評価とするなどの趣旨を口頭で説明した。

3.2.1　１期生のアンケート結果

キャンプは１年生全員が参加した。クラスメイトとの親睦については、「非常にできた」63%、「ややできた」37%であり、個人差はあるが親睦できていた。教員との親睦については、「非常にできた」18%、「ややできた」58%で、学生と比べると課題が残る状況であった。キャンプを通じて「友達との交流が図れ、仲良くなれた」、「楽しかった」、「自分の大学生活の目標を立てることができた」などの意見があった。

講座の受講率は、「社会人マナー」と 2019 年開催の新人看護師を迎えた「キャリアデザイン」が 50%を下回ったが、概ね 70%以上の学生が受講していた。主な参加理由は、「自分に必要な内容だと思ったから」、「興味がある内容だったから」との回答の一方で、「何となく」、「教員に参加を勧められた」との回答も一部にみられた。およそ 60%の学生が「印象に残った」と答えたのは看護職のスペシャリストを迎えた「キャリアデザイン」で、専門・特定・訪問看護師や保健師・助産師の講演、ミニシンポジウムをとおして「自分の将来に向けて考えさせられる話だったから」、「将来の視野が広がった」、「さまざまな看護職の話を聞くことができたから」が理由であった。講座に関して、「機会があったらまた参加したい」、「今になってもっと参加すればよかったと思う」という意見がある一方、「単位をつけてほしい」という意見もあった。

3.2.2　２期生のアンケート結果

講座の受講率、及び満足度が高かったのは、「レポートの書き方」と「国家試験対策講座」であった。講座の参加理由は「自分に必要と感じた」、「興味がある内容の講座に参加した」が多かった。講座に参加した学生からは、「自分に必要な情報の他、知らなかった知識や考え方を得ることができた」、「自分の課題に向き合い、その原因や改善方法まで学修することができた」、「自分をよく知ることができた」、「取り敢えずやってみようという思いを持つようになった」などの意見があった。

3.2.3　3期生のアンケート結果

キャンプ実施後のアンケートでは、クラスメイトとの親睦について「非常に図れた」55%、「やや図れた」45%で、1期生と同様に個人差はあったが親睦が図れていた。一方、教員との親睦については、「非常に図れた」29%、「やや図れた」56%で、2019年に実施した白川郷キャンプに比べ、図れたとする学生の割合が増加した。

講座については、前期に実施した「レポートの書き方」、「労働と権利」の受講率が高く、7月以降に実施した「社会人マナー」や「アンガーマネジメント」、「プレゼンテーション」等は受講率が低迷した。しかし受講者は少人数であったものの参加意欲は高く、理解度・満足度は概ね100%近くであり、参加学生はその意義を実感していた。

3.2.4　4期生のアンケート結果

キャンプを通じてクラスメイトとの親睦は「非常に図れた」と「図れた」の合計が90%であった。教職員との親睦は3期生と同様に85%、2年生の先輩との親睦については58%であった。2年生の参加者数は男女2名ずつ合計4名としたため、1年生のグループ数より少なく、グループによって関われた度合いに差があった。前年度と比較して受講率が改善し、各講座に対する満足度の「非常に満足」、「満足」を合わせた数値と今後の学生生活への活用度の「非常に活かせる」、「活かせる」の合計数値は100%に近かった。

3.2.5　社会人基礎力

社会人基礎力は、4期生を対象に、講座に参加したことが「どのような力を養うことになったか」、「どのような力を意識して取り組めたか」についてアンケート項目を追加して調査を行った。

キャンプについては、「前に踏む出す力」と「チームで働く力」について「養えた」と回答された要素が多かった。12の能力要素で最も多かったものは「主体性」、「傾聴力」で65%、「実行力」、「働きかける力」、「柔軟性」は約60%以上であった。講座の中で受講者数が比較的多かった講座「レポートの書き方」では、最も「養えた」が多かった能力要素は「計画力」、「発信力」で47%、次いで「主体性」42%であった。また、参加学生の満足度が非常に高かった「プレゼンテーション」では、「主体性」83%、「実行力」、「発信力」は71%、「創造力」、「情況把握力」は63%で全体的に評価が高かった。

講座によって「養えた」とする能力要素の違いはあったが、講座での活動は社会人基礎力の自己認識につながったことを確認できた。

4.　考察

2023年4月から正課科目として位置づけられたSUNゼミの整備・充実を図るため、これまでの実践と成果を振り返り、活動の意義と今後の課題について検討する。

4.1　看護学部における初年度教育の重要性

文部科学省による「大学における教育内容等の改革状況等について（令和2年度）」[10]では、初年次教育を実施する大学数は令和2年度で 727大学（97%）となり、日本全体の9割以上の大学が初年次教育を導入している。レポート作成方法やプレゼンテーション方法、学問だけではなく大学教育全般に対する動機づけや、社会人になるための基礎力を養うプログラムを開設する大学が多い現状が示されている。

SUNゼミは､課外活動としての実施に起因して活動内容や日時により参加学生数の変動が大きかったが、参加した学生の満足度は高く、今後の学生生活への活用度も期待されていた。これらのことから、SUNゼミは初年次教育として学生の学びに一定の効果を示せる活動であると考えられる。

SUN ゼミの基盤となったキャンプは、入学したばかりの学生が大学での生活に慣れ学びやすい環境をつくることが大きなねらいであった。林ら[11]は初年次教育におけるキャンプ体験について、「通常の社会関係とは離れ、クラスというこれからの大学生活において重要となる集団単位での関係構築に焦点を当てた活動が豊富に含まれたプログラムを体験したことから、大学内のSocial Provisionに効果的であった」としている。学生の感想からも、入学早期のキャンプ活動は、同じ目標をもち学び合う仲間との親睦を図るのみでなく、その関係性を通し、さまざまな社会人基礎力を育成できていたことがわかる。また、3期生までのキャンプは教職員が主体となり取り組んできたが、4期生では、創作パフォーマンスを通してキャンプ前から仲間と作り上げる活動を行うようにしたことで、主体性を促すことができている。上級生の参加の導入も、ともに看護を学ぶ仲間としての他学年との交流や学生主体の活動を促進できた。1年生をサポートする上級生の参加数を増やして1年生の不安を軽減できるような体制を整え、学生主体でキャンプが運営できるように教職員が支援することで、初年次教育で得た学びを上級生でさらに進化させることができると考える。初年次生と上級生の他学年間交流は、近い将来像の想像と人間関係の構築の実践を学生にもたらす。日常の学修場面では得難い体験を通して、学生が互いの存在を認め合い、「大学は仲間とともにあり、自己の成長を期待できる場である」と入学早期に認識される。これこそが現代の初年次教育に求められる学生への重大な動機づけと考える。

4.2　社会人基礎力の育成上の課題

SUNゼミでは、看護職を目指す者としての基本となる技能・態度を養うとともに、看護職として求められる社会人基礎力である「1.前に踏み出す力（アクション）」、「2.考え抜く力（シンキング）」、「3.チームで働く力（チームワーク）」の3つの能力を培うことを初年度教育の一部と位置づけて取り組んだ。アンケートの結果から、SUN ゼミは教員がねらいとした社会人基礎力が育成されるきっかけとなっていることが分かった。

キャンプでは、学生間の交流や親睦を図るとともに「前に踏み出す力（アクション）」「チームで働く力（チームワーク）」を養うことを目的とした。チームビルディングを意図した活動を通して目的を達成することができた。特に4期生で取り組んだ創作パフォーマンスでは、主体性や実行力など「前に踏み出す力」や、傾聴力や柔軟性などの「チームで働く力」の能力を意識的に養うことができていた。自分たちが表現したい成果物を時間内に完成させるためには、メンバーシップとして各人がアイデアを出しまとめようと働きかけることが必要になる。また、グループの意見をまとめるには他者の意見をよく聴き、自分と違う意見を認めることが必要になる。参加満足度の高さは、そういった関わりの結果として現れ、達成感や自己効力感がもたらされたものと考えられる。岡林[12]は、表面的な関わりでは問題ないが、お互いに踏み込む状況に過剰な不安を抱く現代学生が多いと報告している。看護職は、多くの職種と協働しチームで働く力を求められる職種である。傾聴力や柔軟性はチームで協働するには必須の能力である。また、対象のニーズに合ったケアを実践するためにも患者の多様な訴えを傾聴することは重要で、本活動のような限られた時間内に歩み寄り、折り合うコミュニケーションは看護の姿勢の基本となる。様々なニーズや問題に応えるためには、人に言われて動くより主体的に考え働きかける姿勢が求められる。本キャンプにおけるこれらの活動は看護職を目指す学生には効果的であったと評価できる。

講座のうち「プレゼンテーション」は、自分が伝えたいことを相手の心に届くようなプレゼンテーショ

ンの作り方と、話し方のコツや「発表する力」を強化する目的で取り入れたが、「発信力」以外にも「主体性」、「実行力」、「創造力」が高かった。写真や絵などを用いて視覚的に相手にわかりやすく伝えるための方法を考え、工夫したことがこれらの能力要素の養成する機会になったと考えられる。さらに、アンケートの回答には、「同じ授業を受けていた子の知らないところや新しい魅力を知ることができた」、「他のグループのユニークな発表も聞いて楽しかった」などがあった。課題に取り組む際にグループワークを取り入れたことが上手く機能し、目標以上の社会人基礎力が身についた一要因となった。

「レポートの書き方」の結果は「プレゼンテーション」と異なり、レポート作成の要領は学べたものの他の講座に比べ能力要素について「養えた」とする割合が低かった。新野[13]は、初年次教育で実施した基礎ゼミが小人数グループで課題を調べる活動によって学生の主体性や対話を促し社会人基礎力を上げたと報告している。「レポートの書き方」は、「大学で求められている学修方法についての理解を深めたい」と学生が自主的に参加した講座であったが、講義形式中心で行われたことが社会人基礎力を養えた割合の低さと関連していたと考えられる。学生に人気が高く関心が高い講座であっても、社会人基礎力を養うためにはその方法が重要である。

社会人基礎力で伸ばす能力・要素は個人差がある。また、入学時の学力に差があることから、すべての講座を参加する必要のない学生も存在するだろう。学生が自分の能力を評価し必要な講座を選択して受講できる仕組みも、学生にとっては有効な方法かもしれない。

学生はレポートや国家試験対策などの身近で現在の生活に直結する内容に関心が高い傾向にあった。参加学生数が少なかったテーマは少し先の将来を見据えた社会人基礎力で、実用的なイメージがしづらかったことが要因と考えられる。これらのことから、教員と学生の求める活動の在り様にギャップがあったことがSUNゼミの回数を重ねるごとにみえてきた課題である。

社会人基礎力は、4年間の看護基礎教育の中で自他相互の作用によって引き続き養われる必要があり、1年次に限られた正課外活動では限界がある。初年次の学生のニーズに沿いながら将来的な社会人基礎力の礎が養える方法論を検討する必要がある。

4.3　課題と今後の方向性

以上の成果を踏まえ、SUNゼミは看護学部教授会の審議を経て2023年度の看護学部カリキュラム改編により教育課程の正課科目として位置づけられることとなった。科目の方向性として、ともに学ぶ仲間および教員との学修コミュニティの構築、主体的学修に必要なスタディスキル技術の獲得、対人関係スキルの修得などを掲げる。

4年間のSUNゼミ活動を振り返った結果、3点の課題が示唆された。それは、これまでの活動で獲得された在学生の社会人基礎力のその後の活用・発展性、スタディスキルの学修方法と教員のフィードバックのあり方、そして看護学部の全教員間の問題意識の共有である。以下に詳細を述べる。

社会人基礎力に関する課題は、人と関われる課題に取り組むことが有用であることを考慮して、それぞれの能力・要素が養える活動を考えることと、初年次に養われた力を定着させるために、上級年次の学修・生活でどのような力を発展させ、どのように活かされているかを明らかにし、今後の教育に反映することである。

スタディスキルの学修については、これまでのSUNゼミで実施したレポートの作成方法などを学生のニーズが高い内容を継続することとした。学生が興味・関心を持てるキャッチフレーズでの講座の周知や、教員側からみた「良いレポート」とは何かという視点で構成した講義により、多数の学生が参加し、高い理解度や満足度が得られた。このような工夫により学生が受講前から何を学ぶことができるのかといった

問題意識の理解が動機づけにつながる。また、学修成果のフィードバックにより、教員と学生とのコミュニケーションの時間が増加し、それが学生の SUN ゼミの理解度や満足度の向上、および教員側の学生理解に繋がっていくと考えられる。

教員側の課題としては、SUN ゼミに携わる教員と看護学部全教員との意図・目的の共有が挙げられる。課外活動の位置づけであったため、委員会の構成教員中心の活動展開となったことの限界は否めない。しかし、初年次生が看護学生として成長するためにはすべての教員からの働きかけ、刺激が有用である。今後、課程正課科目として展開する場合にいかにして全教員に意義・意図の共有を図り、合意を得ていくことができるか、その方法を検討する必要がある。

今後の SUN ゼミの教授内容は、今後、入学生が置かれる状況を把握するとともに社会的動向にも合わせて柔軟に対応し、本学看護学部に入学した学生が安心して学べると感じられる構成とすることが望ましい。具体的には大学での学修や生活に必要で即時に活用・実践できる学修環境づくりやスキルの修得を段階的に積み上げ、大学生活の夢を持てるような内容を検討する必要がある。また、初年次および初年次以降に学ぶ看護専門科目と関連づけることができる内容・方法の吟味が求められる。

5. おわりに

2019 年 4 月の看護学部開設から完成年度までの 4 年間の SUN ゼミの活動実績を振り返り、その課題と今後のあり方を検討した。挙げられた 3 課題とその対策として、①在学生の社会人基礎力のその後の活用・発展性－人と関わる課題の創設と上級年次を視野に入れた学修･生活目標の明確化、②スタディスキルの学修方法と教員のフィードバックのあり方－学生のニーズが高い学修内容や興味･関心が持てるような広報と教員の積極的なフィードバックやコミュニケーションの工夫、③看護学部の全教員間の問題意識の共有－本科目を多くの教員が担当できるような工夫や FD 等を通しての看護学部の全教員間の問題意識の共有が示唆された。

今年度から、SUN ゼミは正課科目として位置づけられた。4 年間の実績及びこれらの課題と対策を踏まえて、新入生が大学生活に適応し、夢や目標を持ち、実行に移せるきっかけとなる魅力ある科目とするために、大学での学修や生活に必要で活用・実践できる学修環境づくりやスキルの修得を段階的に積み上げ、新しい初年次教育「スタートアップ看護ゼミナール」へと精錬し、より充実を図りたい。

【引用文献】

1）経済産業省：社会人基礎力，https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/（アクセス年月日：2023 年 4 月 10 日）
2）経済産業省：社会人基礎力育成の手引き－日本の将来を託す若者を育てるために　教育の実践現場から－，p.23-35，河合塾，2010.
3）箕浦とき子：組織で活きる社会人基礎力の育成①　看護教育に求められる社会人基礎力，看護展望，40(3)，80－85，2016.
4）文部科学省：令和４年度学校基本調査（確定値），令和４年12月21日，https://www.mext.go.jp/content/20221221-mxt_chousa01-000024177_001.pdf（アクセス年月日；2023 年 4 月 10 日）

5）中央教育審議会：学士課程教育の構築にむけて（答申），平成 20 年 12 月 24 日，
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf
（アクセス年月日：2023 年 3 月 10 日）
6）前掲書 5.
7）藤田哲也：初年次教育の目的と実際.リメディアル教育研究，1(1)，1-9，2006.
8）文部科学省：文部科学大臣指定（認定）医療関係技術者養成学校一覧（令和 4 年 5 月 1 日現在）看護師学校（大学），https://www.mext.go.jp/content/20230418-mxt_igaku-100001205_1.pdf（アクセス年月日：2023 年 5 月 2 日）
9）富樫千秋：全国看護系大学を対象とした初年次教育の実態.千葉科学大学紀要，12，223-230，2019.
10）文部科学省：大学における教育内容等の改革状況等について（令和 2 年度），
https://www.mext.go.jp/content/20230117-mxt_daigakuc01-000025974_1r.pdf（アクセス年月日：2023 年 5 月 3 日）
11）林綾子，宮本友宏，水津真委：初年次教育としてのキャンプ体験が大学適応感に及ぼす影響についての探索的研究－Social Provision に着目して－，野外教育研究，21(1)，1-13，2018.
12）岡林春雄: 関わりを回避する若者たち－1997 年調査と 2019 年調査を比較しながら－，徳島文理大学研究紀要，(103),27-36，2022.
13）新野由子，糸井和佳，清野純子，他：看護学士課程 1 年生の社会人基礎力の変化　第 1 報　－初年次教育の基礎ゼミを通して－．帝京科学大学紀要，15，1-9，2019.